2017年7月16日

中原キリスト教会

**「ヨシュアの戦いと聖絶」**

聖書箇所：ヨシュア6:13-27

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日のお話はヨシュア記の中から、ヨシュアに指導された戦争について見るとともに、ここで提示されている「聖絶」ということについて考えてみたいと思います。「聖絶」については旧約聖書学の最大の難問と言って良いと思います。戦争の結果、勝利した時、敵のすべてを殲滅せよ、という神の命令が発せられています。このことを新改訳聖書では「聖絶」と訳しました。残酷極まりない神の命令のように見えます。この神の命令に加え、ヨシュア記7:2では「容赦してはならない」とまで言われています。これが憐みに富み給う主なる神の真の姿なのだろうか、というのが根本的問題です。これは「聖戦」とは何なのか、戦争について旧約聖書はどうみているのか、という問題に繋がって行きます。

　その問題に立ち入る前に、モーセ亡き後のイスラエルをカナンの地に導く指導者となったヨシュアの戦いの概略を見ます。ヨシュアはまず、エリコの町を攻めるべく斥候を出します。二人の斥候はラハブという遊女に出会い、泊めてもらいます。このラハブはイスラエルの民がカナンの地に侵入してきたときに手引きをする約束をします。その後、神の使者と思しき人物が現れ、「主の軍の将」としてきた、とのべます。いよいよ、エリコに入ります。城門を固く閉ざしていた、とあります。そこで主の言葉がヨシュアに臨みます。6:2です。「見よ、わたしはエリコとその王、および勇士たちを、あなたの手に渡した」とあります。そして6日間エリコの町の回りを回り、7日目に7人の祭司が７つの雄羊の角笛を持って、契約の箱の前を行き、7度回って、一斉に時の声をあげよ、という主の言葉でした。そのようにしました。すると城壁が崩れ落ち、イスラエルの兵士は町に上って行き、エリコを攻め取った、と言われています。「聖絶」という言葉が、6回も出てきます。6:21には「男も女も、若い者も年寄りも、また牛、羊、ろばも、すべて剣の刃で聖絶した。」とあります。そして6:26では「ヨシュアは、そのとき、誓って言った。「この町エリコの再建を企てる者は、主の前にのろわれよ。その礎（いしづえ）を据える者は長子を失い、その門を建てる者は末の子を失う。」とあります。エリコの町は絶対再建されてはならない、ということです。

　続いて7章ではアカンの罪が語られています。ヨシュアは次にアイの町を攻めるべく準備をし、兵を派遣しますが敗北してしまいます。その原因がアカンという人物が主なる神のものとされるべき美しい外套や金銀を敵から奪って自分のものにした、ことによるのだと言われています。そして、7:25で「全イスラエルは彼（アカン）を石で打ち殺し、彼らのものを火で焼き、それらに石を投げつけた。」と言われています。この戦にまけた直後、主の言葉がヨシュアに臨みます。7:11-12では「イスラエルは罪を犯した。現に、彼らは、わたしが彼らに命じたわたしの契約を破り、聖絶のものの中から取り、盗み、偽って、それを自分たちのものの中に入れさえした。/だから、イスラエル人は敵の前に立つことができず、敵に背を見せたのだ。彼らが聖絶のものとなったからである。あなたがたのうちから、その聖絶のものを一掃してしまわないなら、わたしはもはやあなたがたとともにはいない。」と言われています。ここでは、罪の結果イスラエルが聖絶の対象となり、主なる神はイスラエルとともにいない、といわれています。この話の中にも「he:rem」が8回も出てきています。聖絶のものを完全に扱うことで、主の御業が完結するのです。

　アカンをとり除いて全軍でアイの町の攻略にかかります。勇士たち三万を夜のうちに派遣した、と書かれています。そしてアイの町の北側に陣を構えるとともに、5千人を伏兵として西側に配備しました。ヨシュアと本隊はアイの兵に打たれ、荒野への道に逃げましたが、ここで伏兵がアイの町に侵入し火を放ちます。町の方を振り返ったアイの兵士にヨシュアの本隊が襲い掛かり、イスラエルの大勝利となります。アイの王も生け捕りです。そして8:24-26では「イスラエルが、彼らを追って来たアイの住民をことごとく荒野の戦場で殺し、剣の刃で彼らをひとりも残さず倒して後、イスラエルの全員はアイに引き返し、その町を剣の刃で打った。/その日、打ち倒された男や女は合わせて一万二千人で、アイのすべての人々であった。/ヨシュアは、アイの住民をことごとく聖絶するまで、投げ槍を差し伸べた手を引っ込めなかった。」と記されています。アイの町の住民全員を殺した、と言われています。

ヨシュアは更にカナンの地の少数部族との戦闘を続けます。そのなかで従順さを示したギブオン人については「たきぎを割る者、水を汲む者」とし、殺すことをしませんでした。これは聖絶の例外があったことを示しています。エルサレムの王などは連合しつつイスラエルに対抗し、イスラエルの侵入を阻止しようとします。10:25では「ヨシュアは彼らに言った。「恐れてはならない。おののいてはならない。強くあれ。雄々しくあれ。あなたがたの戦うすべての敵は、主がこのようにされる。」と言われています。この「強くあれ。雄々しくあれ」という表現は、ヨシュア記の表現として有名です。カナン南部の町マケダでは10:28「剣の刃で、この地とその王とを打った。彼は、この地とその中にいたすべての者を聖絶し、ひとりも生き残る者がないようにした。」とあります。

またエグロンでの戦いでは10:35「剣の刃でそれを打ち、その日、その中のすべての者を聖絶した。」と言われており、ヘブロンでは10:37「そのすべての町々とその中のすべての者を、剣の刃で打ち、ひとりも生き残る者がないようにした。」とあります。更にデビルでは10:39「その地とその王、およびその中のすべての町々を取り、剣の刃でこれらを打ち、その中のすべての者を聖絶し、ひとりも生き残る者がないようにした。」とあり、カナンの地全土で10:40「そのすべての王たちを打ち、ひとりも生き残る者がないようにし、息のあるものはみな聖絶した。イスラエルの神、主が命じられたとおりであった。」と記されています。パレスチナ北方のハツォルについては11:11「その中のすべての者を剣の刃で打ち、彼らを聖絶した。息のあるものは、何も残さなかった。彼はハツォルを火で焼いた。」とあり、11:14「これらの町々のすべての分捕り物と家畜とは、イスラエル人の戦利品として自分たちのものとした。ただし人間はみな、剣の刃で打ち殺し、彼らを一掃して、息のあるものはひとりも残さなかった。」と言われています。聖絶です。また11:20「イスラエルを迎えて戦わせたのは、主から出たことであり、それは主が彼らを容赦なく聖絶するためであった。まさに、主がモーセに命じたとおりに彼らを一掃するためであった。」とあり、アナク人を聖絶し、最後は11:23で「こうしてヨシュアは、その地をことごとく取った。すべて主がモーセに告げたとおりであった。ヨシュアはこの地を、イスラエルの部族の割り当てにしたがって、相続地としてイスラエルに分け与えた。その地に戦争はやんだ。」と記されています。以上で、一応、カナンの地の平定です。

このようにヨシュアを指導者とするカナン占領の戦いは聖絶の連続です。この後も周辺の民族との戦いは続きますがカナンの地の占領ということでは一応一段落です。この「聖絶」について考察する前にこのヘブル語である動詞「ha:ram」、名詞「he:rem」についてみてみます。「he:rem」の語根は「別にしておく」「俗用に供することを禁じる」という意味だと言われています。「別にしておく」は神様のためにこの世のものと区別すること即ち強い意味の「聖別」を意味することになります。このヘブル語の「he:rem」が「奉納、奉献」の意味を持つようになります。この神のものとされるのは最上の部分でなければならず、人間の用に流用するのは大罪であり死に値します。純粋に宗教的用語です。レビ記27:28では「人であっても、家畜であっても、自分の所有の畑であっても、人が自分の持っているすべてのもののうち主のために絶滅すべき聖絶のものは何でも、それを売ることはできない。また買い戻すこともできない。すべて聖絶のものは最も聖なるものであり、主のものである。」と言われています。またこの語は異教徒との戦いのなかで使用されることが大部分であり、戦争の勝利により、その異教の民の働きを完全に停止する必要があります。そのことが、異教の神々の力を完全に停止させることになります。このことから「he:rem」は「滅ぼす、滅ぼし尽くす、破壊する、殺す」という言う意味を持つようになります。異教の神の力を封ずるために命ある者を完全に破滅させるのであって、命を奪うこと自身が目的ではありません。基本的に宗教的な事柄なのです。新共同訳では「聖絶」は「滅ぼし尽くす」と訳されています。口語訳では「奉献物として」と訳されていました。更には「呪われる」の意味にも使われるようになり、第一コリント16:22の「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来てください。」の「のろわれよ」に繋がっています。ギリシャ語で「anathema」です。この「呪われる」というのは呪術をもって呪い殺す、というようなことではなく、一切の神の恵みから排除される、ということです。この恵みからの排除が中世において「anathema」が教会除名の意味で悪用されることになる理由です。

この「聖絶」は出エジプト記で1節、レビ記で3節、民数記3節に出てきますが申命記で7節と増え、ヨシュア記で21節と急増します。このあとは士師記で2節、第一サムエルで7節に登場します。ダビデ、ソロモンのイスラエル王朝が確立してからは「聖絶」はありません。このことは「主なる神が戦われる聖戦」はサウル王の時代までのことだ、ということです。確立した王国による戦争はもはや「神の戦い」ではなく「人の戦い」だということです。この「人の戦い」としての戦争はイスラエル王国の分裂、そして南北両王国の滅亡の時代に預言者によって否定されることになります。イザヤ、エレミヤにおいては「聖絶」は主なる神の「裁き」の表現として使用されます。「聖絶」は主なる神のなす業という伝統が維持されています。

では、この「聖絶」問題はキリスト教神学ではどう解釈されるのでしょうか。伝統的なプロテスタント神学では、この「聖絶」を宗教的次元での象徴的行為と理解し、実際に神の聖絶命令が発せられたと考えるのかどうかや、ヨシュアとイスラエルが実際に聖絶行為を行ったと考えるかどうか等、については信仰上「無益な問い」という態度をとるのです。一部歴史的出来事の反映を認めたにしても、それはずっと昔のことであり、今の我々の信仰には無関係という態度をとるのです。旧約はイエス・キリストを指し示すことにのみ意味があり、主イエスの到来により過去のイスラエルの歴史は意味を失った、と考えるのです。新旧約聖書をまるごと神の言葉と考える聖書主義の立場からはそうは行きません。新約聖書と旧約聖書の持つ意味の相違は認めつつも新旧約聖書全体を生活、生き方の指針としているクリスチャンの場合はそうはいかないのです。ましてや恵みと憐みに富み給う主なる神がヨシュア記に記されているような「聖絶命令」を発せられることは考えにくいのです。問題は単純ではありません。旧約聖書最大の問題と言われるくらいの事ですから、そんな簡単に回答がある訳でもないのは当然です。

ここで、イスラエルのカナン侵入というのは、実際はどのようなものであったかを見ておきます。カナンの地に於けるイスラエル民族の成立経緯は極めて複雑です。出エジプトはエジプト第19王朝ラメセスII世の治下BC1250年頃と推測されています。その出エジプトの民、カナン周辺地区で牧羊業に従事していた人々、カナンの地での飢饉のため没落し浮浪の民と化した人々、更には「海の民」と称せられるギリシャ系の人々のカナンの地に侵入してきた人々、もちろんその前からカナンの地に住んでいたアラム系の人々が主導権争いも含め、対立、連携、混血等のなかでイスラエル民族が形成されていった、と考えられます。人種的、血縁的つながりはありません。その中で、イスラエル、言葉の意味ではエル即ち神が戦う、という意味ですが、この民族を一つの集団として結びつけるものは、共通の神、即ちヤハウェ信仰だけです。それは当時でも圧倒的少数派であった出エジプトの民が持ち込んだ信仰です。言葉も違います。文化ももちろん違います。経済的状況も異なります。あえて共通点をあげよと言えば“くいつめた放浪集団“ということでしょうか。カナンの地に侵入したイスラエルの民は戦いに勝利するには「主なる神」ヤハウェにより頼むしか道はない、という弱小な民であったのです。ヤハウェの起こす奇跡が勝利を齎すのです。それが主なる神が戦う聖戦なのです。ヤハウェ信仰が弱まるとすぐ昔からの農業神信仰、自然神信仰などが復活してくるのです。ヤハウェ信仰は当時の宗教的状況からして極めて独自な点を持って居ました。超越的な唯一創造神でありながら、イスラエルの民を自らの民として選び、峻厳な裁きの神でありながら、イスラエルに恵みと憐みを施される神です。主なる神は、周囲は異教のオンパレードのような状況で、新たな民族集団としてのイスラエルをゼロから形成しようとされたのです。選ばれた民としてのイスラエルを保ち、育てるのは、信仰の純粋さをなんとしてでも確保していく必要性がありました。「聖絶」において異教徒を殲滅することが命令される背景にはこのような事情があったものと考えられます。

もう一点、ヨシュア記の叙述は歴史的事実か、ということに関連して述べておく必要があります。まずエリコの戦いについてです。出エジプトの民がエリコを攻略したのはBC1200頃と考えられますがエリコの発掘調査の結果その頃には町は廃虚となっておりイスラエルの民によるエリコ攻略は歴史的事実ではないことが確実とされています。BC2300年頃即ち、ヨシュアの時代から1100年ほど前に町が破壊された形跡がある、ということです。エリコ陥落の物語りは昔の話の伝承がヤハウェの起こした奇跡としてヨシュアの時代によみがえり、新たな伝承として後世に伝えられたのであろう、と想像されます。過去の現在化、将来の現在化はイスラエル信仰の中心的テーマですが、エリコ陥落の物語りも過去の現在化の一つとして理解することができます。過去の現在化は出エジプトを象徴している過越しの祭りのように、祭儀の執行という形で現れます。祭儀のなかで、過去の大いなる出来事が祭儀の中で繰り返されるのです。エリコ陥落の場合も小規模な戦闘があり、それが過去の言い伝えと結びついて、神の力による奇跡的出来事として記されたのだろう、ということです。

エリコ陥落についての歴史的事実については決着がついたようですがアイについてはその場所がはっきりしていないためまだ決着とはいえません。しかし、大勢はエリコと似たような状況であったろう、と推測されています。やはり城壁があった時代はヨシュアの時代よりずっと以前であり、その当時は集落の存在さえ認められないというのです。聖書に書かれているような計略による勝利というようなことは事実と異なるかも知れません。もしかしたら予想外に「海の民」が加勢してくれたのかもしれません。また、もしかしたらアイの地をめぐって反乱のようなものが起きたのかもしれません。果ては、エリコと同じように過去の出来事の再解釈的伝承なのかもしれません。問題はヨシュア記によれば「聖絶命令」が発せられ、実際に実行された代表例がエリコとアイの二つの都市陥落の時です。そうだとすれば「聖絶命令」は、既に破壊された地となっていた場所に純粋にヤハウェ信仰を中心とした共同体を作り、その地に在る異教的な“いのちあるもの”一切を滅ぼせ、という命令であったと考えられます。その共同体は物質的には貧しい集団であったに相違なく、近隣の豊かな地域への誘惑は抑えがたいものであった、と思われます。

この2都市以外への「聖絶命令」はどうでしょう。考古学的にBC12cに激しい戦闘があったとされているのはハツォルとラキシュの2都市です。ヨシュア記の記述をよく見ると、カナンの地への侵入はいくつかの都市の攻略のみであり、カナンの地全体の征服と言うには程遠い状況です。聖書での記述は「聖絶し、生きる者がないようにした」という簡単な叙述です。他方で、16:10には「彼らはゲゼルに住むカナン人を追い払わなかったので、カナン人はエフライムの中に住んでいた。今日もそうである。」と記されており、「聖絶」が徹底していないことが読み取れます。祭司職にあるものの命をとり、それで宗教的な意味での「聖絶」の完了と見做したのかもしれません。そもそも、町という“点の征服”でヤハウェ信仰を確立できるはずはありません。

「聖絶」ということが言われているのはイスラエル民族の草創期の時期のことです。主なる神は、イスラエルを選び、その民がヤハウェを戴く信仰集団としての形成されるために、その戦いの先頭に立って戦い、奇蹟的勝利を与え、選びの民を育てようとされたのです。その信仰的純粋さを維持するため主は「聖絶」を命じられました。しかし、主はこれが文字どうりの意味で徹底できない、ことを御存知でした。イスラエル王国の確立と繁栄、そして南北への分裂、両王国の滅亡とユダヤ民族の捕囚と帰還、そして律法遵守を中心とする民族宗教としてのユダヤ教の確立という旧約の全歴史を通してイスラエルの民に対する異教の誘惑は強い力となり存続し続けました。純粋な信仰集団としてのイスラエルを形成、確立し、この民により全人類の救いの道を示す、という神様の計画は成就しませんでした。イスラエルという民族的制約を超え、律法をより深いところで捕え、恵みの神に立ち帰る信仰をもつ民を作るには新しい契約が与えられなければならなくなるのです。「聖絶」は真のイスラエルを作り出す主なる神の熱情を示すものです。「ねたむ神」の熱情です。しかし、神様はその神の命令に従うことのできない我々の罪もご存じです。「聖絶命令」という神様からのショッキングな命令もイスラエルの歴史の中でその必要性があったのだ、ということ、しかし、それは守られず、常にヤハウェ信仰から離れていく民を自らの民とされたというイスラエルの神の摂理の不可思議さをむしろ大切にしたい、と考えるものです。

私たちはこの「聖絶」の言葉を見る時、私たち新しきイスラエルを作り育て維持しようとされている主なる神の熱情を思い起こし、悔い改めにより、主イエス・キリストに立ち帰ることが求められているのです。祈ります。

（ご在天の御神様、今日の学びを感謝致します。「聖絶」というなかに、神様の我々に対する恵みと憐みと慈しみを見ることのできる幸いをありがとうございました。この恵みに答える者とさせて下さい。イスラエルの歴史の中から神様は新しい契約も必要を見出されました。どうか私たちが新しきイスラエルの民として福音の証人として歩むことができるよう、知恵と力と勇気をおあたえください。主イエス・キリストのみ名により祈ります。）